

Title	コミュニケーションを誘発する「造り物」：大阪天満宮の祝祭を中心に
Author(s)	高島, 幸次
Citation	懐徳堂研究. 2012, 3, p. 191-209
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24660
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コミュニケーションを誘発する「造り物」

—大阪天満宮の祝祭を中心に—

高島 幸次

はじめに

江戸時代の大阪に発した「造り物」文化は、やがて全国各地に伝播し、現在でも西日本を中心に「つくりもんまつり」などの名で、約五〇カ所に伝承されているという。そのなかには、地域振興の期待を担っている例も少なくない。

しかし、その発祥の地である大阪市中では、いまではわずかに陶器神社（坐摩神社の末社）の「陶器人形」がその伝統を受け継ぐだけである。大阪府下に視野を広げても、一九七七年に復活された八尾市の「八尾木の民芸つくりもん祭り」と、二〇〇五年に中断された「ひらかた大菊人形」が思い浮かぶ程度である。

その一方で、研究者の「造り物」への関心は高まっている。一九九六〜九八年には、国立歴史民俗博物館の共

同研究「『つくり物』の総合研究」が実施され（以下、研究Aと記す^①）、二〇〇三〜〇五年には、元興寺文化財研究所が「東アジアにおける自然の模倣（造り物）」に関する研究を行っている（以下、研究Bと記す^②）。さらに、二〇〇八年には、国立民族学博物館の共同研究「民俗行事における造り物の多様性」が始まった（以下、研究Cと記す^③）。

このような研究の進展に歩調を合わせるように、大阪では実作面において「造り物」文化の復活の兆しがある。二〇〇一年開館の大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）では「嫁入道具一式 獅子」などが再現・展示されている。またボランテイアガイド「天満天神御伽衆」は、二〇〇二年に「蜷貝の藤棚」を復活して以降、断続的に「造り物」の製作に取り組んでいる。さらに二〇一一年には、くらしの今昔館が開館一〇年記念

企画として「大つくりもの『浦島太郎と龍宮城』」展を開催した。このように、研究の蓄積に伴って、大阪の「造り物」文化は復活に向けて動き出しているのである。

本稿では、これまでの研究・実作面の動向を踏まえつつ、大阪天満宮の天神祭や正遷宮にみられた「造り物」について、特にその機能面を検証したい。

注

(1)『国立歴史民俗博物館研究報告(共同研究)「つくり物」の総合的研究』第二集(同館、二〇〇四年)。

(2)『東アジアにおける自然の模倣(造り物)に関する研究』(元興寺文化財研究所、二〇〇六年)。

(3) 国立民族学博物館ホームページ。

(4) 大坂の「造り物」を扱った業績には、西岡陽子「大坂におけるツクリモノの展開」『研究紀要・館報』一号(大阪市立住まいのミュージアム、二〇〇一・二〇〇二年度)、相蘇一弘「近世大坂の『つくりもの』砂持・正遷宮を中心に」『前掲(1)「研究報告」など優れた成果がある。しかしながら、本稿が「造り物」の機能を論じようとしているため、その論旨にあまりリンクできていないことをお詫びしたい。

一、「造り物」の定義

論を進めるにあたって、まずは「造り物」の定義をしておかねばならないが、これが結構難しい。

牧村史陽の『大阪ことば事典』を引くと、「ツクリモン【造り物】を立項し、「見せ物などの細工人形のこと。菊人形、あるいは、夏祭の瀬戸物町の瀬戸物細工の人形なども造り物と称した(後略)」と説明している。ここに「ツクリモノ」ではなく「ツクリモン」と立項していることは評価したい。「モン」は「モノ」の音便で、大阪だけではなく、管見でも富山県高岡市福岡町 福知山市夜久野町、熊本県城南町などで「つくりもん」と発音されている。しかし、その語釈については、細工人形に絞り込み過ぎており不満が残る。

そこで、研究Aの『研究報告』に所収された日高薫「共同研究の経緯と概要」をみると、次のように定義されている。

「つくり物」とは、儀礼・祭礼の際に、飾りもの・見せものとする目的で造られる人工的な造形物をさす。種々の人形や物を趣向をこらして配置した洲浜や、山車・山鉾などの上に飾られる山に見立てたつくり山、造花、つくり枝など、「風流(ふりゅう)」

の語で表わされる飾りものから、能の道具立てである舟・山・宮・釣鐘などの舞台装置など、古代から現代に至るまで、階層を問わず多彩な展開が見られる。

ここでは、『ことば事典』とは対照的に、広義の「造り物」を念頭においているが、それは「造り物」が古代から現代に至るまでに如何に多種多様に展開してきたかを示すものでもある。同『研究報告』に所収の一〇編の論考をみても、各論の関心は「中国の造花」「大嘗会の標の山」「近世大坂のつくりもの」「鹿児島の大鼓踊り」「放生会の人形・馬形」「四季竹図屏風」「有用性を持たない置物」「電子メディアによる民俗伝承」「プレセピオとサクロ・モンテ」「装飾とかざり」と、実に雑多で、却って「造り物」とは何かが解らなくなってしまう。

また、研究Bでは、そのテーマの通り「造り物Ⅱ自然の模倣」ととらえ、より広義に捉えて、「世界全般で人間生活の全過程のなかに」みられるという。その報告書に収められた四編の論考も、その関心は「観賞用の花」から「通貨模造品」「洲浜などの造り山」「竹製縁起物」におよび、やはり雑駁の感は否めない。

研究Aから一〇年を経て発足した研究Cでは、その轍を踏まないように、研究代表者の福原敏男は、研究対象

を次のように制限する。

本研究における造り物とは、都市部の祭礼や年中行事において、町の各所に、仮説・展示され、あるいは山車などに乗せられて町を引き回される造形物をいう。(中略)現在、造り物はハレの時空間における民家のしつらい、街路の賑わいや装飾を演出する道具としてその価値が認識されつつある。

その上で、「造り物」を次の二種に大別している。

①一つは「一式飾り」と称する形式で、台所用品など日用品を利用し、陶磁器などの同種類のもの、あるいは野菜や草花などを材料とし、素材をそのまま、変形させずに用いて或るテーマを組み立てるものである。

②いま一つは芝居や物語などの一場面を、人形を使って、背景を含めてリアルに再現する造形物である。

本稿が関心を持つ大阪天満宮の天神祭や正遷宮には、まさに右の①と②の「造り物」が登場する。以下では、まず②の「造り物」に該当する「御迎人形」について、つづいて①の「一式飾り」の「造り物」について論じた

注

(1) 牧村史陽編『大阪ことば事典』一九八四年、講談社。語釈中の「菊人形」については、有名な「ひらかた大菊人形」の前身として、「日清戦争（明治二七、八年）のころから、菊人形にネットを入れはじめた」という「翫菊庵」や、「明治四十年ごろ、老朽して休業中の五階の建物に移った」という「五階（眺望閣）」がある（長谷川幸延『大阪歳時記』一九七一年、読売新聞社）。なお、「瀬戸物町の瀬戸物細工の人形」は、先述の「陶器人形」のことである。

二、御迎人形

1、御迎人形の登場

ア、天神祭の略史

平安時代中期に始まった天神祭の長い歴史の中で、最大の転機は江戸時代初期の御旅所の常設だった。それまでは、大阪天満宮の社頭の浜から大川に神鉾を流し（鉾流神事・ほこながししんじ）、その漂着した地にその年限りの御旅所を仮設し、そこに神霊が渡御する、これが天神祭の始まりである。

鉾流神事を受けて御旅所が仮設されると、神霊は本殿を出て、周辺の氏地を陸路で巡幸した後、船に乗り換え

て大川を下航して御旅所に向かうのである。その陸路を「陸渡御（ふなとぎよ）」、船路を「船渡御（りくとぎよ）」という。

この神霊の渡御は、「氏地の平安、氏子の無事」を見守るために行われるが、天満宮周辺の氏子たちは祝意を表すために、神霊の先導や御供として賑々しい行列を組み、また街並みを祝祭空間として演出したのである。

ところが、江戸時代に入ると大川下流域にまで人家が建て込み、御旅所の仮設場所の確保が困難となったため、京町堀川右岸の鷺島（のちの雑喉場）に御旅所を常設し、毎年、同地に御神霊を迎えることになった（鉾流神事は中止）。やがて同地に魚市場が形成されると、御旅所は木津川右岸の戎島の地に移された。

この御旅所の常設化は、船渡御に新たな動きを生みだした。従来は、天満宮周辺の氏子たちが先導・御供の船列を整えて、神霊の船渡御に祝意を表してきたが、御旅所が常設されたことにより、その周辺の氏子たちも、船渡御を出迎えるための船列を仕立てて大川を遡航するようになったのである。これを御迎船（おむかえぶね）という⁽²⁾。

それは、ちょうど大坂経済の成長期に重なり、また元禄文化が華開いた時期にあたっていた。御旅所周辺の氏

子たちは、彼らの嗜好と教養の源泉であった能や文楽・歌舞伎などの登場人物をモデルに大型の風流人形「御迎人形（おもひかえにんぎょう）」を拵えた。御旅所周辺の町ごとで造られた御迎人形は、天神祭が近付くとそれぞれ町の町角で披露され、祭礼当日には御迎船上に飾られて、大川を遡航し、神霊を迎えたのである。祝祭空間が、大阪天満宮周辺から、御旅所周辺にまで広がったのである。この御迎人形こそが、研究Cの分類②の「造り物」なのである。

イ、御迎人形の一覧

元禄期に登場した御迎人形は、それ以後も、その時々流行りの演目に応じて製作し続け、弘化三年（一八四六）刊行の『天満宮御神事 御迎船人形図会』には、四体もの御迎人形が紹介されている²³。以下に、その人形名と、所蔵の町名、人形細工人名を掲げる（○印は現存の人形）。

- 1、鯛 雑喉場町 大江卯兵衛
- 2、三番叟 富島二丁目 大江宗七
- 3、雀踊 江之子島西之町 柳文三
- 4、海士 江之子島東之町
- 5、安倍保名 安治川二丁目 柳文三
- 6、与勘平 安治川上老丁目 大江卯兵衛

- 7、酒田公時 江之子島東之町 難波屋周助
- 8、関羽 江之子島東之町 大江忠兵衛
- 9、胡蝶舞 江之子島東之町 柳文三
- 10、鬼若丸 江之子島東之町 大江忠兵衛
- 11、八幡太郎義家 江之子島東之町 大江宗七
- 12、御所五良丸 木津川町 大江卯兵衛
- 13、猿田彦 木津川町 大江卯兵衛
- 14、羽柴秀吉 木津川町 大江卯兵衛
- 15、神功皇后 木津川町 玉山源二郎
- 16、楠正成 木津川町 大江忠兵衛
- 17、恵比須 戎島町 大江卯兵衛
- 18、加藤清正 九条村町 大江宗七
- 19、狸々 上博労町 大江宗七
- 20、素盞鳴尊 戎島町 柳文三
- 21、白楽天 戎島町 大江卯兵衛
- 22、鎮西八郎 木津川町 大江卯兵衛
- 23、佐々木高綱 木津川町 大江忠兵衛
- 24、武内宿祢 戎島町 大江卯兵衛
- 25、奴照平実八楠正儀 寺島町 大江宗七
- 26、野見宿祢 寺島町 瀧原平兵衛
- 27、石橋 木津川町 大江宗七
- 28、木津勘助 天満屋敷 笹屋何某

29、朝比奈三郎	寺島町	長谷川銀長
30、大職冠鎌足公	寺島町	
31、葛の葉	寺島町	
32、張良	寺島町	
○ 33、豆蔵	木津川町	
34、吼噓	上福島	
35、奴妻平	江之子島東之町	
36、樊噲	ザコバ町	
37、鍾馗	木津川町	
38、西王母	木津川町	
39、布袋	戎島町	
40、源九郎狐	江之子島西之町	
41、天神花	九条村町	
42、菊菫童	江之子島東之町	
43、濡髪長五郎		
44、瓢駒		

右のうち、1〜29は弘化二年の正遷宮に展示された人形、30〜44は非展示の人形だという。一町で複数の人形を所有していることが注目される。現在、忠実なレプリカを造ろうとすると一体で一千万円もするという豪華絢爛の人形を、木津川町のように一一体も所有していることに驚かされる。

2、御迎人形のキャラクター

ア、芝居の登場人物としての御迎人形

右の人形一覧をみれば明らかのように、そのほとんどが芝居の登場人物である。御迎人形が登場した元禄期の大坂では、井原西鶴や近松門左衛門らに代表される町人文芸が熟成し、大坂において能や文楽（人形浄瑠璃）・歌舞伎が隆盛を極めた。その風土を背景に登場した人形が、舞台に題材を求めたことは当然のことといえよう。

現存する御迎人形の多くは、二m余の大型人形であるが、その細工人に「大江」姓の多いことが注目される。「大江」姓は、今につながる文楽人形師の家系である。かつては、その手足や頭などが動くカラクリが施されていたのも宣なるかなといえよう。町角や船上で披露の際には、芝居の一場面を彷彿とさせるように見栄を切ったのだから（現在は、全ての部材は固定されている）。

御迎人形の登場により、天神祭に群参した人々は、芝居に思いを馳せる楽しみを得ることになったのである。ここで幾つかの人形の出自をみておこう。たとえば、5「安倍保名」と6「与勘平」は『蘆屋道満大内鑑』の主従であり、保名の妻は31「葛の葉」である。8「関羽」は、今では『三国志』で有名だが、江戸時代の大坂町人たち

にとつては、歌舞伎『閏月仁景清』で御馴染みだった。武蔵坊弁慶が、10「鬼若丸」の幼名で登場するのは、『鬼一法眼三略巻』である。

23の「佐々木高綱」は、鎌倉時代の実在の人物としてではなく、『近江源氏先陣館』の登場人物としての高綱である。江戸時代には「大坂の陣」の舞台化が禁止され御迎人形「佐々木高綱（真田幸村）」



ていたため、時代を鎌倉時代に仮託して舞台にかけたが、大坂町人に人気の豊臣方の猛将・真田幸村は、高綱に擬

せられた。それでも、観客に幸村であることを知らせるメッセージとして、その襦袢には真田家の家紋「六文銭」が縫い付けられていた（現在は真田幸村として展示）。歴史上の楠正儀が、25「奴照平」というのは『太平記菊水之巻』だ。

イ、疫神としての御迎人形

しかし、右のように御迎人形が当時評判の芝居から採られたこと指摘するだけでは、十分ではない。実は、平安時代中期に成立した天神信仰は、大將軍信仰の星辰信仰による疫神信仰を採り入れ、疫病の中でも特に「疱瘡」退散が天神信仰の中枢に位置した。⁽³⁾

天満宮と疱瘡の深い関わりについては、たとえば慶長一三年（一六〇八）に豊臣秀頼が疱瘡に罹ったとき、「此春、秀頼公疱瘡令煩給時、天神御使とて色々有吉瑞と云々」秀頼公煩漸本復、北野天神影向奇特と云々⁽⁴⁾と記録される如くである。また宝永三年（一七〇六）に丹羽左京大夫が大阪天満宮に屋敷を寄進した際の寄進状には、「左京大夫旧冬疱瘡相煩、変万死一生大切に候節、依立願成就平癒二今度天神宮江被致寄付候⁽⁵⁾」とあることを挙げてもいい。

疫神信仰の視点から御迎人形を見直せば、その痕跡をみつけることは難しくない。例えば『御迎人形図会』

に紹介された人形は、必ず衣装のどこかに「緋色」を使っている。前近代には、緋色は疫病を退散させる色として信じられており、御迎人形は芝居のキャラクターであるとともに、疫病退散の役割を担っていた。換言すれば御迎人形は「疱瘡神」の依代だったのである。

そのため、初期の御迎人形は、能の19「猩々」や37「鍾馗」のように、「疱瘡神」として馴染みのキャラクターを優先的に選んだきらいがある。

『鎮西八郎降魔鎬』や『鎮西八郎誉弓勢』などの主人公である22「鎮西八郎（源為朝）」も、彼が流された八丈島には疱瘡が流行しなかったことから疱瘡神と認識されていた。近松門左衛門の『日本振袖始』で活躍する20「素盞鳴尊」も、疫病神の「牛頭天王」と同一視されていた。また、近松の『姫山姥』に登場する7「酒田公時」も、疱瘡を象徴する酒呑童子を討った頼光四天王の一人だった。

14「羽柴秀吉」についても、『絵本太功記』や『祇園祭礼信仰記』から採られたというだけでなく、朝鮮出兵の影響が大きかったことを指摘しなければならぬ。というのは、当時の知識では疱瘡は西方から伝播するものとされており、「朝鮮出兵」疱瘡退治」の連想が下敷きになっていると考えられるからである。18「加藤清正」

も同様の文脈で理解でき、また15「神功皇后」も「三韓征伐」からの連想が大きいに違いない。

3、御迎人形の機能

ア、正遷宮の御迎人形

御迎人形が、天神祭・船渡御の数日前から御旅所周辺の町角に立てて披露された後、祭礼当日には御迎船の船

御迎人形「安倍保名」



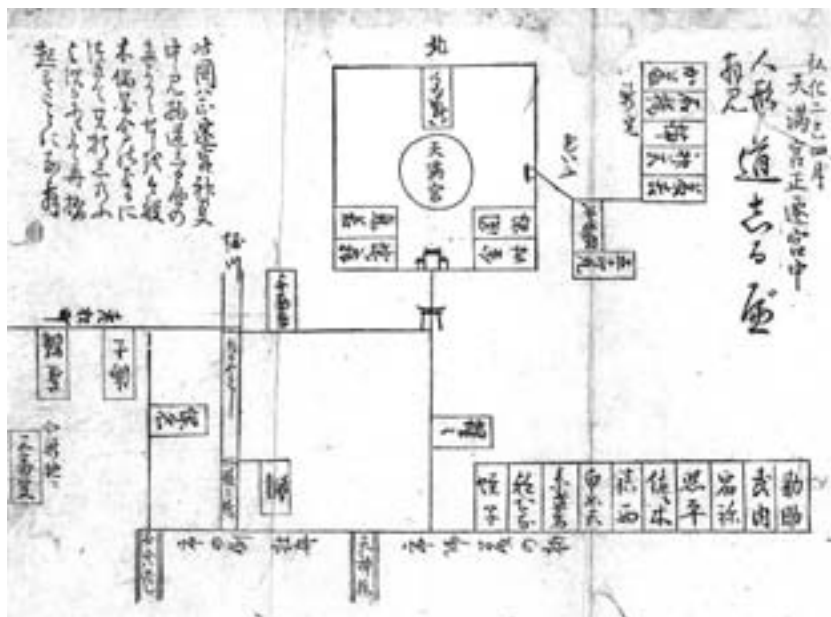
上に飾り立てられたことは先に述べた。大川の川幅を考えると、岸から船上の人形を観賞するのは難しく、宵宮までの町角こそが、御迎人形を間近に楽しめる機会だった。「安倍保名」にまつわる次の伝承もそのような空間で生まれたのだろう。

文政七年（一八二四）のこと、天満青物市場の銭屋孫兵衛の娘おさわは、市之側の町角に飾られた御迎人形「安倍保名」の妖艶な容姿に心を奪われ、恋煩いのため床に臥せてしまう。そこで、翌年の天神祭には、孫兵衛は町に懇願して銭屋方で「保名」を飾り付けたところ、おさわは快癒した。

御迎人形は、御迎船に飾り立てるのが本旨だが、実は町角で飾られている数日間にこそ、親しく観賞できたのである。

その意味では、毎年の天神祭よりも、二五年ごとに行われる天満宮の正遷宮は御迎人形を観賞する絶好の機会だった。なぜなら、年々の天神祭では御迎人形は、それを所蔵する御旅所周辺の町々で披露されたため、その全てを楽しむのは大ごとだった。その点、正遷宮の際には、御迎人形は天満宮に運ばれ、境内境外に集中して展示されたため、頃合いの遊興空間を演出したのである。弘化

弘化二年「人形拝見道しるべ」



弘化三年「御迎船人形町道しるべ」



二年（一八四五）の正遷宮に作られた「人形拝見道しるべ」をみると、境内に三体、大川沿いに一〇体というように並べられているから、その全てを見て回るのにはそれほど困難ではない。しかも、天神橋北詰の東側には「市場藤の棚」、西側には「市の側牡丹」の「造り物」も出ていた（研究Cの分類①にあたるので次節で再説する）。

— 先の『天満宮御神事 御迎船人形図会』も、実は弘化二年（一八四五）の正遷宮を機に刊行されたものだった。その翌年には御旅所の正遷宮が行われたが、このときに発行された「御迎船人形町道しるべ」では、御旅所周辺に数多くの御迎人形が展示されたほかに、「〇大きくらくり物いろく数多し」の注記もみえる。この「つくり物」も分類①に該当する。

イ、コミュニケーション誘発装置としての御迎人形
 では、天神祭や正遷宮に際して町角に飾られた御迎人形を、人々はどのように楽しんだのだろうか。単なる大型の風流人形として眺めるだけではなく、きつとその人形の登場する芝居の場面を思い浮かべたに違いない。当時の大坂町人にとって人形浄瑠璃や歌舞伎は必須の趣向であるとともに教養であった。

私はかつて、この町角の数日間の情景を思い浮かべて、

「御迎人形」の楽しみ方を次のように推測したことがある。

芝居は当時の人々にとって、最高の娯楽でしたから、「源九郎狐」の人形を見れば、誰もが『義経千本桜』の筋書きを思い浮かべたことでしょう。この狐は、義経の家来の佐藤忠信に化けて、親狐の皮を張った「初音の鼓」を持つ静御前を守護したのだと、わが子に教える得意そうな親の顔が浮かびます。

「朝比奈三郎」の場合も、「曾我物」と呼ばれる芝居での彼の活躍はあまりにも有名でした。時には、この人形の長袴に描かれた鶴の丸の紋は、初世中村伝九郎が、朝比奈初演の際に、自家の替紋であった鶴の丸を用いて大当たりをとり、それ以来、朝比奈役は鶴の丸を付けるようになったのだと、得意げに講釈する芝居好きもいたでしょう。

あるいは「濡髪長五郎」の前では、『双蝶々曲輪日記』の話に花が咲き、喧嘩好きの長五郎は怪我をしないため、額に濡紙を巻いていたのだから、「濡髪」ではなく「濡紙」と書くべきだと、蘊蓄を傾けたかも知れません³⁾。

このように、「造り物」としての「御迎人形」は、天神祭や正遷宮を奉祝するだけでなく、そこに群集する

地元民や参詣者のコミュニケーションを誘発する装置だったことに注目しておきたい。そのことは、次節に紹介する「つくりもん」についても同様の指摘ができればよい。

注

(1) 天神祭の成立経過については、高島幸次「天神祭の成立と発展」(二〇〇一年、思文閣出版)を参照のこと。

(2) 高島幸次編『天満宮御神事 御迎船人形図会』(一九九六年、東方出版)。

(3) 高島幸次「大阪天満宮と大將軍信仰―星辰信仰と疱瘡神―」『大阪天満宮史の研究』第二集(一九九三年、思文閣出版)

(4) 「当代記」『当代記・駿府記』(一九九八年、続群書類従完成会)

(5) 『大阪天満宮所蔵古文書目録』G-4

(6) 高橋昌明『酒吞童子の誕生―もうひとつの日本文化―』(一九九二年、中公新書)

(7) 本殿の造営修理などのため、神霊をいったん権殿に遷すことを「仮遷宮」といい、造営修理が成就した後に再び本殿に遷すことを「正遷宮」という。

(8) 高島幸次「御迎人形の楽しみ方」『大阪天満宮社報 てんまてんじん』第30号、一九九六年、大阪天満宮)

三、つくりもん

1、正遷宮のつくりもん

ア、つくりもんの定義

前節で検討した「御迎人形」は、研究Cの二分類のうち、②の「造り物」だったが、本節では①の「造り物」について検討する。

私は、この①の「造り物」については、左記のように定義し、以下では「つくりもん」と表記したい。

「つくりもん」の本旨は、ありふれた日常品の「風合い」に着目し、何か別の造形物に「見立て」ることにある。奇抜な意外性のある材料で見物人の意表をつき、その造形の工夫や巧みさで驚かせるのだ。この「風合い」と「見立て」は、「アイデア」と「技術」の勝負と言い換えてもいい。その「風合い」の相似性が高ければ高いほど、元の材料に気づきにくい、造形が巧みであればあるほど、元の材料を感じさせない。優れた「つくりもん」は、製作者に説明されて、初めてそのアイデアと技術に脱帽するものである。換言すれば、「つくりもん」の魅力は、見事にだまされる面白さにあるといえよう。

このような理解に対して異論もある。「材料もわから

ないほど本物そっくりに作ってしまったのでは面白くない訳で、見る者に用いた材料を意識させ、その一式の材料が別のものに変身する面白さを楽しむのである^①」というのである。

しかし、「つくりもん」の実作を経験した立場から言えば、材料を意識させるために本物度を控える（技術を控える）ことは考えにくい。松本喜三郎の「生人形」のように「本物そっくり」こそが「つくりもん」製作の究極の目標だろう。

もちろん、右の定義は「つくりもん」の本旨をいっているのであって、現実にはこの制限から外れた「造り物」も数多い。それはそれでいいのだが、以下に述べる天満宮の祝祭に見られた「つくりもん」は、この狭義の定義が通用すると考えている。

この定義に従えば、毎年の祭礼ごとに、アイデアを絞り、技術をふるうことは難しく、何十年に一度の正遷宮こそが「つくりもん」の舞台に相応しい。実作の経験でいえば、「風合い」に着目して「見たて」る作業には大変な時間と労力を要する。何年もかけてというのは大げさにしても、何カ月もかけないと趣向を凝らした見事な「つくりもん」の造形は難しい。

そこで、「見立て」のヒントを得るためのマニュアル

本が、江戸時代後期に三回出版されている。天明七年（一七八七）の『造物趣向種』、天保八年（一八三七）の『四季造物趣向種』、安政七年（一八六〇）の『造物趣向種二種』⁽²⁾である。三冊を合わせれば一〇〇を超えるアイデアが絵入りで紹介されている。冒頭に述べた「くらしの今昔館」における「獅子」なども、この本をヒントに製作されている。しかしながら、同書のアイデアが全て実用的かというところでもない。なかには机上の空論というしかないものも含まれている。

大阪天満宮の場合、二五年ごとの式年大祭時に定例の正遷宮を行ったが、火災や地震などに伴う臨時の遷宮もあった。市中他の神社においても同様の遷宮が繰り返されたから、大坂市中における遷宮は、その規模の大小はあれ、かなりの頻度で行なわれていた。そのような町柄だったから、右の「趣向種」などが売れたのだろう。神社の「正遷宮」に、「つくりもん」を飾って祝意を表すのが常だったのである。

イ、「つくりもん」の起源

「つくりもん」の起源を考えると、正遷宮を祝う「奉納銭」に行き当たる。銭を銭としてではなく、銭を材料とした造形物に仕立てて奉納したのが、その起源だと考えられる。

現在でも、祝儀などを手渡すときに、紙幣を封筒に入れたり懐紙に包んだりして、むき出しの紙幣を手渡すことは避ける風習がある。江戸時代の町人も、日常の売買に使用する「ケの銭」と、奉納時の「ハレの銭」は使い分けたのである⁽³⁾。封筒や懐紙の準備がないときには、裸の（お金の）ままで失礼」と詫びるのは、「ケの銭」で申し訳ないという感性である。そこで、正遷宮の奉納銭を神社に収めるに際して、銭で何かを造形することに よって「ハレの銭」に変えるのが「つくりもん」ではなかったか。

江戸の例ではあるが、寛延二年（一七四九）不忍池弁財天に出品された、「文銭で拵えた蛇」が最古の造り物だ というのも⁽⁴⁾、この推測に整合する。

やがて、銭以外の材料を使った様々な「つくりもん」が派生してゆくが、それでも、銭の「つくりもん」も消えることはなかった。大阪天満宮では、享和元年（一八〇一）の正遷宮に、氏地各町が工夫を凝らした「紙細工の関羽」「乾物の唐獅子」など六一種もの造り物を飾っているが、その中に「銭細工」で「牛」や「渡唐天神」「花籠」「梅ノ鉢植」「花たて」「つ、みこたいこ」などが造られていていることに注目したい。

弘化二年（一八四五）正遷宮でも「思い、に御神道

具・積銭・包金・細工銭・竹馬・俵米等、又は炭木・俵物など日々神前に供え、その美麗しかりけること、もなり^⑥」といい、嘉永二年（一八四九）の御霊神社の正遷宮に「銚銭・竹馬細工・金銀等いろ、に致し、その上納、真に夥しき積銭なり^⑦」というのも「つくりもん」の發生の姿を窺わせる。現代でも見かける五円玉の「宝船」や「五重塔」も、その延長線上に位置づけられるのである。

ところで、大阪天満宮の正遷宮には定番の「つくりもん」があった。それは、先述の「藤の棚」と「牡丹」である。前者は蜷貝を藤棚に見立てたもので天神橋北詰めから東へ、後者は紙製の牡丹の造花で、天神橋北詰めから西側へ飾ることが決まっていた。毎回の正遷宮に登場する「蜷の藤棚」と「牡丹の花壇」は、一回性を旨とする「つくりもん」のなかでは異質だが、それだけ高い評価を得ていたのだろう。この二種に加えて、その年独特の「つくりもん」が耳目を集めるのが天満宮の正遷宮だった。

その習慣は近代になっても変わることなく、明治一年（一八七八）の正遷宮に発行された「天満宮正遷宮二飾り人形并作り物場所附道案内」では、定番の「藤の棚」「牡丹」のほかにも、境内北側に「梅ト松」、天神筋丁（表



明治二年「天満宮正遷宮二飾り人形并作り物場所附道案内」

門筋)に「もみぢ」のつくりもんが出ている。

2、つくりもんの機能

ア、口上師「あまからや」

先に「つくりもん」の面白さは、見事にだまされることにあると指摘した。現在でも、本物と思いつんでいた花が、他人の指摘を受けて造花だと気付くことがある。そこで、優れた「つくりもん」には、説明(種明かし)役が必要となる。また一目見てその材料や工夫に気づく程度の作品であっても、それを面白く観賞するための説明役はいるほうが良いに決まっている。

たとえば、嘉永三年(一八五〇)に難波新地に出た見世物「す・み大滝」では、「滝の前方にて役者物まねを致し、面白く囃し立て大流行りなり」と記録されている^⑧。見世物・造り物が隆盛を極めた幕末の大坂には、「あまからや」と名乗る口上師が活躍していた。弘化五年(一八四八)、稲荷社内の「金比羅権現正遷宮」に際し、「あまからや」は木綿で造った大象の口の中で口上している。木綿にて大象の形を致し、同背にて天狗とも法螺(ほら)・鉦(かね)・笛・銅鑼(どら)を鳴らし、真ん中には大天狗狂乱の所にて、前に兎天狗、鈴(りん)・太鼓を鳴らし芸を致す。口上云う者、かの象の口中

よりあまからや出て口上を申すなり^⑨

『近來年代記(下)』を繰れば、右のほかにも次のような見世物・造り物で「あまからや儀平(義平)」は活躍している。

(ア) 嘉永二年九月 豊受皇神宮正遷宮

菊人形

(イ) 嘉永三年正月 難波新地

硝子細工

(ウ) 嘉永三年五月 御池橋詰め

水がらくり

(エ) 嘉永三年八月 北ノ新地燈籠会

影絵「狐の嫁入り」

(オ) 嘉永六年五月 上難波宮正遷宮

塗物一式「加藤八陣ノ船」

(カ) 嘉永七年七月 道頓堀坂町ノ焼地

水からくり怪談大寄

その後のあまからやについては、江戸に進出したらしい^⑩。「あまからや」は特定の見世物・造り物に詳しいから口上したというのではなく、求められればどこへでも出かけ、何についてでも口上したのだろう。

イ、天満天神御伽衆の実作

二〇〇一年、天神祭のボランティアガイド「天満天神

御伽衆」が活動を始め、翌年には大阪天満宮正遷宮の定番「蜷の藤棚」を作成し、同年の天神祭に披露した。蜷の貝殻六〇〇〇個で「藤棚」を造り、天満宮参集殿西側に飾ったのである。幸いに新聞やTVなどのマスコミに

蜷の藤棚



数多く採り上げられ、参拝客からも好評を得、以後毎年
の天神祭には補修しながら、貝殻も一万个以上に増やし
て、披露している。

次いで二〇〇五年には、干瓢・麩などの乾物で「狸々舞」を造った。『趣向種』をヒントにしながらも、試行錯誤を繰り返し、その袴は昆布を干瓢で縫って仕立てた。帯の垂れは、高野豆腐に椎茸を貼り付け、赤熊は干瓢を紅生姜で染めた。着物の模様は色麩を組み合わせてそれらしく貼り付けた。

狸々舞（『造物趣向種二編』）



二〇〇六年には、『趣向種』には頼らず、御伽衆のアイデアによって、現代の文房具で「鳳凰」を造った。色鉛筆やカラーCDを鳥の羽らしく並べ、鶏冠にはカラーゼムクリップ、足は賞状筒、という具合である。賞状筒の模様は鳥足の「風合い」に似ていると気づいて「見立て」たのである。



乾物の狸々



文房具の鳳凰

天神祭の期間中の展示だから、「つくりもん」にも数え切れない群衆が見物に来る。ところが、遠めに蜷の藤棚を眺めながら、その仕掛けに気付かないままに通り過ぎる参拝者がいたのには驚いた。七月下旬に藤は咲かないと思うのだが、それを疑問に感じさせないほど本物らしく見えたということである。御伽衆に誘われて初めて気付くのだった。乾物一式の「狸々」も、御迎人形と並べて展示したため、御迎人形の一種と勘違いされたらしい。各部の材料を説明すると感嘆の声が上がった。文房具一式の「鳳凰」は、さすがに解説はなくとも、材料に気づかれるが、それでも制作の苦労話などを熱心に尋ねられる。

「つくりもん」は、「御迎人形」と同じく、製作者と見物客のコミュニケーションを誘発する機能をもっていたのである。

注

- (1) 前掲、相蘇「近世大坂の『つくりもの』―砂持・正遷宮を中心に―」
- (2) この三冊は『造物趣向種三種』（一九九六年、太平書屋）として復刻されている。
- (3) 福原敏男「献金の意匠―御金のつくり物―」『is』78号（一

九九七年、ポララ文化研究所）

- (4) 朝倉無声『見世物研究』（二〇〇二年、筑摩書房）
- (5) 『撰陽奇観』巻之四十三。
- (6) 『近來年代記（上）』（大阪市史料調査会、一九八〇年）
- (7) (8) (9) 前掲『近來年代記（下）』
- (10) 川添裕『江戸の見世物』（二〇〇〇年、岩波新書）

おわりに

以上、大阪天満宮の「造り物」として、「御迎人形」と「つくりもん」を紹介してきたが、その第一義的な意味は、神霊を迎えることであり、祝意を込めた奉納であることはいまでもない。しかし、それだけなら町角に飾り、あるいは町並みを装飾して、多くの群衆に披露する必要はない。船の舳先に乗せるだけでよく、本殿の奥深い神前に供えるだけでいい。

町角、町並みに披露され、多くの見物客を集めるのは、その御迎人形やつくりもんの出来栄もさることながら、それが登場する芝居にまで話題を広げたいためであり、そのアイデアと技術に感心してもらいたい賞賛してもらいたいためであった。前者を「神と人間の交流」というなら、後者は「人間と人間の交流」といってもいい。

御迎人形の前では、隣の見知らぬ人に、芝居の蘊蓄を傾ける人がいてもいい。「つくりもん」造りの苦勞を語る製作者がいて、それを批評する客がいてもいい。「御迎人形」も「つくりもん」も、コミュニケーションを誘発する装置としての機能を持っていたのだから。とくに多くの群衆が訪れる都市祭礼の場合、見物客と地元民との交流は、その満足度を高めるための必須のアイテムであつたに違いない。

コミュニケーション能力の減少・変質が話題になる昨今、もう一度、大阪に「造り物」文化が華開くことを願いたい。

付記

本稿の「二、つくりもん」は、懷徳堂記念会の依頼を受けて、去る四月二日の「平成二三年度懷徳忌講話」でお話させていただいた『「つくりもん」文化の今昔』をリライトしたものである。

懷徳堂が創立された享保九年（一七二四）から六〇余年後の天明七年（一七八七）に『造物趣向種』が出版されている。「造り物」文化が大阪市中に華開いた時代と、懷徳堂の歴史は重なっている。そこに学んだ人々は、どこかの祭礼や正遷宮で造り物を楽しみ、息抜きをしたに

違いない。

講話の機会を与えていただいた懷徳堂記念会にお礼を申し上げます。